

内外交差点

ここはまだ旅の途中—— タクシー世界一周記<欧州編③>

成川 史華氏 (扇交通社長) 第8/12回

フランス南東部のニース。地中海沿岸の明るい都市だが、ビーチはほとんど存在せず、見渡す限り岩肌が広がる。裸足で歩くと痛いほどだが、それがこの地域の普通の風景らしい。そこから訪れたのが、小さな城塞都市エズ。カナダ滞在中に友人がカタツムリのような可愛い町があると教えてくれた街だ。かつて外敵の侵入を防ぐために造られた構造が、今もそのまま観光に形を変えて、住民の生活を守っている。日本では出会うことのできない歴史や文化を直に感じながら次の都市へ飛ぶ。ヨーロッパの都市間の移動は、もっぱら飛行機だ。南米のバス移動と違い、LCCなど格安の航空がとて

も多い。国境を超える特急列車もとても面白い経験だった。スイスは、鉄道網が驚くほど発達しており、移動はすべて鉄道と徒歩。タクシーに乗る機会は一度もなかった。マッターホルンを見ようとツェルマット村から出発したが、途中で霧に囲まれ、何も見られずに帰ってきたのが非常に残念だった。「トップ・オブ・ヨーロッパ」からアルプスを望む。車窓の外には山肌に沿って走る線路。スイッチバックを繰り返しながら、ゆっくりと登る車両。名画のような光景が眼前に広がる。大学時代の友人を訪ねて立ち寄った街もまた独特で、道路が少なく、歩行者優先の設計。車より人と鉄道が生活の中心にある。車内は日本のように静かではなく、音楽を流したり、お菓子を食べながらおしゃべりをする人も多い。鉄道そのものが“カフェのような社交空間”として機能しているのが印象的だった。

旅の終盤は地中海の島国・マルタへ。海は驚くほど透明で、船が宙に浮かんでいるように見える写真から、新婚旅行や英語留学で人気の国だ。砂浜のあるビーチはほとんどないのはニースと同じ。マルタには、電車がなく車や自転車での移動が主流で、私はマウンテンバイクで島を回った。そこに積み重なった悠久の歴史。ローマ、アラブ、ローマ騎士団、フランス、イギリス。そのどれもが街の中に残り、石造りの建物と混ざり合っている。観光地でありながら、どこか素朴な空気が流れていた。

マルタを最後にヨーロッパを離れ、私は帰国した。パリを経由してJALで帰ってきたのだが、そこで日本のホスピタリティに再会する。泥まみれのバックパックを丁寧に袋で包み輸送中に汚れないようにしてくれたのだ。言葉が通じると

いうのも大きかったかもしれないが、所作や気遣い、さまざまな要素が私を安心させてくれる。日本のホスピタリティは世界に誇る素晴らしい文化だ。海外

へ行くたびにやっぱり日本っていいよなあ——と思うのだ。

帰国後、父の会社に入社したものの、行きたい国はまだまだある。ゴールデンウィークを利用して、アフリカ・ナミビアを訪れた。到着後街をフラフラしているとジロジロ見られたような気がする。特に気にも止めず歩き続けていると通りかかった黒人女性に「K a w a i i !」と声をかけられ、思わず駆け寄って感動を伝えた。サファリツアーに行きたくて街を放浪してたのだが祝日でお店は全てしまっていた。困っていると1人の男性が声をかけてくれた。ツアー会社の社長らしくプライベートツアーを格安で組んでくれたが、カードが使えなかったので現金を持ってきてと言われた。祝日はもちろん翌日の平日までATMが使えない。試行錯誤の中で、カード両面のコピーを取られるという日本では考えられないこともあったが、こんなトラブルもいい思い出だ。

道は日本のように舗装されているところが少なく、ガタガタの道を一日中走る。そんな距離を一人のドライバーが黙々と運転する。ナミブ砂漠、エトーシャナショナルパークを回り首都に戻ってきた。出発前に綺麗な教会の前でアフリカンドレスを着こなしていた女性が素敵すぎて思わず声をかけ、私もあなたみたいな素敵なアフリカンドレスが欲しいけど街では見つからないと話したところ彼女の車で数ヶ所のローカルマーケットに連れて行ってくれた。斧を振り上げ牛を捌き調理し、牛の足が転がっている。少し離れたところでは子供達が遊んでいる。観光客は全く来ないのだろう。ところどころ視線が痛かったが、それでも気にいるドレスは見つからなかった。すると彼女が作ってくれそうな友人がいると紹介してくれ、サファリツアーに出かけている間に作ってくれるというのだ。初対面の人間にここまでしてくれる感動を噛み締めつつツアー中も連絡を取り合い、生地を選び形を選び出来上がりを楽しみにしていた。はじめに出会った教会の前で待ち合わせて再会を喜び、オーダーメイドの一着を購入。お礼の気持ちをこめて伊勢神宮のお守りをプレゼントした。

旅を終えて思う。外国で感じた“自由”と、日本にある“誠実”。どちらもその国が時間をかけて育てた文化なのだろう。そして「可愛い(K a w a i i)」などの日本語が、遠い国でも通じることによって小さな誇りを覚えた。私はこれからも、旅を続けるだろう。

